

活動ピックアップ!

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS 長岡 みんなのSDGs

長岡地域 Nagasaki つなごー手 助け合える地域づくりを目指して



市民の方から米や野菜、レトルト食品などの寄付を募り、高校生までの子どもがいる川崎地域のご家庭に寄付食品をお渡しする地域密着型フードバンク事業を開催。近年“子どもの貧困”が問題視されていますが、地域での現状は見えづらく、顔が見え手渡しできる活動を行うことで、現状の見える化と助け合える地域づくりを目標としています。今後も自立して長続きする運営を目指して活動を続けていきます。

アイリス Iris 学生目線で発信するSDGs



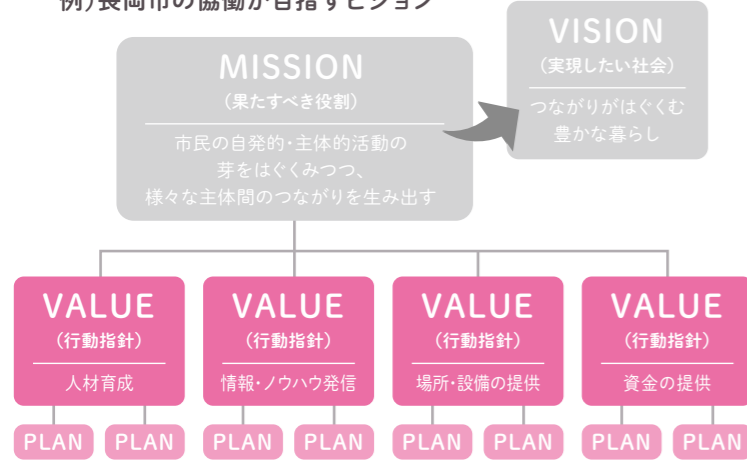
(公財)長岡市国際交流協会主催「原信 presents 輝け!高校生プログラム~Youが明日のグローカリスト~」に参加したメンバーで活動中。SDGsに取り組むことが当たり前の社会になるように、学生に興味をもってもらえそうなSDGsの話題をインスタグラム(@sdgs_nagaoka)に投稿しています。これからはSDGsを体験できるようなイベントを企画していきたいです。

市民活動 虎の巻

研究テーマ **団体の将来図の作り方~バリュー編~**

2号にわたりビジョンとミッションの考え方をご紹介しましたが、今回は最後にバリューの考え方をご紹介します!

例)長岡市の協働が目指すビジョン



バリューはミッションを達成するために必要な行動指針です。いわば、その組織が「生み出す価値=成果」を指します。ビジョンが同じでも、ミッションとバリューは各組織によって異なることも。バリューを考えると、自組織らしさや強みを活かせるようなものにすることが大切です。また、そのバリューを生み出すためのプラン(事業計画)が組めると、ビジョン・ミッションの達成により近づけます。

バリューづくりの注意点

- 行動目標ではなく、その先の成果となるものを考える。
- 自組織の強みを活かしたものにします。

もっと詳しく10分動画で解説中! ご覧になりたい方は、右のQRコードからどうぞ!



知る、つながる、好きになる
ながおか市民活動情報誌

2022

6

vol. 114

Take Free

祭りに学ぶ、



続けるヒント

特集 深沢町連合町内会 中之島風組合

NAGAOKA PLAYERS 古川原 渉さん

活動ピックアップ つなごー手

長岡みんなのSDGs アイリス Iris

センターからのお知らせ

ながおか市民活動フェスタ2022 参加団体募集!

長岡の市民活動団体が作り上げる、まちの文化祭「ながおか市民活動フェスタ」の参加団体を募集します。日頃の活動をPRしたい団体の皆さん、ぜひご参加ください! 初参加も大歓迎です。

申込期間 6月30日(木)まで

開催日時 10月8日(土) 10:00~15:00 会場 アオーレ長岡 参加費 無料

※応募多数の場合は出店数や出店スペースを調整させていただく場合があります。 ※申込期日を過ぎてからの申込みはお受けできませんので、ご注意ください。 ※新型コロナウイルス感染症の流行状況により、内容を変更または開催を中止する場合があります。



詳しくはこちら

発行

ながおか市民協働センター

〒940-0062 長岡市大手通1丁目4番地10 シティホールプラザアオーレ長岡 西棟3F Tel. 0258-39-2020 Mail . contact@nagaokakyodo.net



配布場所

長岡市役所及び各支所、サービスセンターの他、市内図書館、コミセン、子育ての駅等、公共施設に設置しています。



ながおか市民協働センター



祭りに学ぶ、続けるヒント

長岡市市民協働条例の制定から10年。長岡には地縁を超えた多くのNPOや市民活動団体が新たに生まれ育ってきました。その中で「どう活動を持続させていくか」は、多くの団体に共通する悩み。今回は長岡で受け継がれてきた2つの伝統的な祭りの営みから、「活動を続けるヒント」について考えます。

お話を聞いた人



深沢町連合町内会
山崎 篤さん



中之島凧組合
真島 良和さん

長岡が誇る2つの伝統文化

見附今町・長岡中之島大凧合戦は、6月の第1土曜日から3日間行われる行事(2022年度は中止)。その起源は300年以上前と言われる、今の合戦形式になったのは1783年(江戸時代)と言われています。中之島地域からは3組が出場し、見附市今町と合わせ合計8組が刈谷田川両岸から大凧を揚げて行く空中戦は「越後の凧合戦習俗」として新潟県指定無

形民俗文化財に指定。組のメンバーは合戦に向けて4・5月は毎夜公民館に集まり、大凧の絵付けや制作に没頭しています。

深沢は小千谷市と地理的にも文化的にも近い地域。4町内207世帯が氏子を務める深沢神社で行われる秋季大祭では、4台の山車を引き回します。その山車のうちひとつが新潟県指定無形民俗文化財に指定された「巫女翁人形操り」。他と違い深沢では「御子翁」の文字が当てられています。祭りの日には地域を

離れた人たちも帰郷し、笛太鼓や唄のシャギリに参加。町内ごとのステージ発表や花火の打ち上げなど小さな地域ながらも盛大な祭りを続けています。

「大義」よりも楽しさ

祭りは古来より、飲んだり、騒いだりできる数少ない娯楽でした。2つの祭りは、今も「住民の楽しみ」という原点を守り続けています。

中之島の凧合戦は神事としてではなく「好きで続いてきた行事」とのこと。かつては合戦が近づく「男は仕事しないで凧揚げして遊んでろ」と言われた時代もあったんだとか。今でも若手への勧誘文句は「凧、面白いよ！一緒にやらない？」です。

深沢神社の秋季大祭は、観光客はほとんど見に来ない、純粋に住民たちのための祭りです。今こそ伝統の「御子翁」も、当初は周辺地域の流行を取り入れたもの。その精神を忘れず、伝統を守るだけでなく、キャラクターをあしらった山車をつくったり、町内ごとに子ども会や若手などが、よさこい節や、ダンスを披露。祭りを自分たちで楽しむものにしてしています。

多世代が集い、新しく人が来て、人が育つ仕組み

祭りは世代を超え住民が協力して作り上げる場でもあります。

深沢では、町内ごとに祭りに向けて笛、太鼓、踊りなどの練習を1ヶ月ほど前から行っています。練習には、年長児から参加し最初は

シャギリの踊り、小学4年になると笛を覚え、全員がお囃子を演奏できるようになっていきます。また、還暦や入学、新築のお祝いといった節目で花火を打ち上げるなど、多様な関わり方が用意されています。

中之島の「組」に所属するのは30~70代の男性。多世代が共に汗をかきながら、技術を共有しています。凧の組は、もともと青年会や消防団と同様に「入って当たり前のものでした。しかし、最近は組に入る若手も減少。そこで、小学校での凧揚げ体験や、卒業制作での大凧作りなど、小さな頃から大凧の楽しさに触れてもらう機会をつくり、将来の担い手になってくれることを期待しています。

また、地縁組織の特徴に「役職」の持ち回りがあります。誰もが役職を経験できるからこそ人が育ち、強いリーダーがいなくとも活動が続けられる体制がつけられています。

苦勞の先にある喜び

先人から継いできた伝統は、負担に思うことがあるのも事実です。毎年時期が来ると準備に追われ、多くの時間を費やすので、他の事を犠牲にして、わざわざ大変なことをしていると感ずることもあるそう。深沢では、昭和30年代には、会社勤めをする若手が増えたことで、担い手不足となり10年ほど祭りが途絶えていた時期もありました。労力だけでなく、祭りの運営費や、神社の維持、山車の維持、大凧の制作費など金銭的な負担も決して軽くなく、毎年の寄付や協賛集めも一苦勞です。

それでも苦勞の先には、特別な手応えがあります。職場とも、家庭とも違う場所。そこで、集まって、作業して、飲んで、喋って、世代や地域を超えた人との繋がりが生まれていきます。「大変だけど続けていると、こういう場の

そんな地域愛があふれる古川原さんは、2020年から野積にあるカフェレストラン「バナナ・ウインズ」と協力して「お祝い花火WATARU」を始めました。はじめは両親の結婚記念を祝うために花火を上げましたが、今では誕生日やプロポーズなど全ての祝い事をコーディネート。花火を上げた方には、その日のうちに名前が入った写真を提供しています。「寺泊地域でも特に人口減少が進んでいる野積地域はここ数年、新型コロナウイルスの影響もあり元気がなくなっていると感じました。そこで少しでも野積を盛り上げるため、一瞬の花火が一生の思い出になるような活動をしています」。

深沢神社秋季大祭



秋祭りには地域を出た多くの若者が帰郷し、年に一度の同窓会のような場にもなっている。



年長の子とも一緒にシャギリを披露。祭りは住民が舞台に立ちスポットライトを浴びる日でもある。

大切さを実感します。祭りがあるからこそ、日々の仕事や生活にもハリが生まれます」。

取材を通じ、長く続く活動には、住民がつながり合い、関係性を育む力があることを感じました。続けることは苦勞も多いが、乗り越えれば良い思い出になる。そして、その思い出は、

中之島凧組合



大凧の絵付けは、自分たちで行う。凧の枚数が多いとGW返上で制作に当たることも。



シニアも若手と一緒に凧糸を引き走る。大凧揚げの快感は見るだけでは絶対にわからないそう。

今を生きる人達だけでなく、地域の先人や次の世代とも共有されるものとなっていきます。長く続いてきた根幹には、「どうしたら皆で楽しめるのか？」を問い続け、時代ごとに活動を変化させてきた姿勢があるのではないのでしょうか。

NAGAOKA ウワサのあの人にインタビュー! PLAYERS

古川原 渉さん

40歳/会社員/お祝い花火WATARU

1981年長岡市寺泊野積生まれ。野積盆踊り実行委員会やたらどまり若者会議〜波音〜、小中学校のPTA会長など数々の地域活動に関わる。



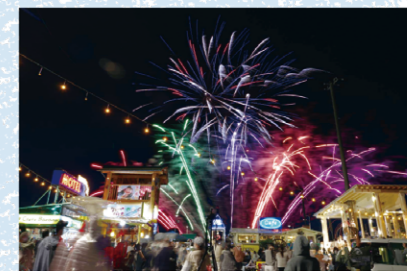
野積地域のために 一つ一つに思いをのせた活動

「自己紹介では、必ず寺泊野積出身と言うようにしています」と生まれ育った野積を大切に様々な地域活動に関わる古川原渉さん。司会や撮影係として地域のイベントを盛り上げています。

古川原さんが地域と深く関わるようになったきっかけは、自身の子どもとの時間を増やすために始めた小学校のPTA会長でした。そこで学校以外で子

どもたちに地域を知ってもらうために2016年から寺泊検定「チャレてら」を実施。「地域を学ぶことで住んでいる地域を好きになってもらいたい。そして、これからも住み続けたいと思うきっかけになるように、先生やPTA、地域の方と一緒に企画しました」。満点をとるために頑張る子どもや満点を取れずに悔しがる子どもが続出したそうです。

毎年3月の卒業記念花火では、卒業を祝う家族のほかに地域の方や地元企業から協賛を募ることで、地域に親しまれる花火となっています。古川原さんが大切にしていることは、野積に遊びに来た人や住んでいる人に喜んでもらうこと。野積に住む人が一人でも増えることで寺泊全体が活性化するように、SNSや写真展示などで野積の魅力を発信し続けています。「一つひとつの活動に思いをのせて、これからもみんなが楽しめることをしていきたいです」。野積地域への愛が伝わる古川原さんの活動で、これからも地域に笑顔があり続けることに期待したいです。



2022年4月9日に開催した「Winds Spring Seaside Live」で古川原さんが提供した写真。